

私の一冊

一般教育等 梅田祐喜 先生

宮沢賢治著 『ポラーノの広場』(新潮文庫)

小鹿図書館 : 913.6/Mi 89

よくありますね、孤島に暮らすことになって一冊の本を持っていくとしたら、あなたはどんな本を選びますか、というような質問が。この一冊はそういう意味の一冊ではありません。いま大切にしている一冊というか、いつもかばんにいれて持ち歩き、弁当の後、お茶を飲みながら、思い出すままに、さわりの部分や心に沁みこむ表現を味わいなおしているといった、そんな本です。もう何ヶ月もそんなことが続いています。もちろん、かばんのなかの他の本に隠れて、眠っている長い時間もあるのですが。

文庫本のいいところは、そんなふうには、手軽に持ち運べ、手軽に開けるということですね。図書館にある『校本 宮沢賢治全集』(筑摩書房)は、異文や、直筆原稿のファクシミリ版が収録され、注釈や研究がびっしりつまった堂々たる全集版で、第一重いし、食後お茶を飲みながら開くような本ではありません。でも、作者の創作過程にまで分け入ることができ、文学の世界の奥深さに導く図書館にはなくてはならぬ書物です。

新潮文庫では、『新編 風の又三郎』、『新編 銀河鉄道の夜』、『注文の多い料理店』、『新編 宮沢賢治詩集』、それと、この『ポラーノの広場』の5冊が出ています。どれもかばんのなかで長い時間を過ごしました。宮沢賢治のどこがそんなにいいの？と聞かれることがあります。

「銀河鉄道の夜」は教室の場面からはじまりますが、先生が天の川がほんとうは何かと生徒たちに質問します。指されたジョバンニは、父親は帰ってこないし、母親は病気で寝ているし、学校が退けたあと印刷工場で働いたり、そんなこんなで頭がぼんやりしていて、知っているのに答えられません。次に指された友達のカムパネルラも、知っているのに、ジョバンニのそんな窮状を思いやって、答えません。ジョバンニの目と心に涙が宿ります。こうした心の使い方がどこからくるのか、こうした悲しみがどこからくるのか、読むたびに考えます。そして、そのたびに疑問は深くなっていくのです。現代の社会はこうした心の使い方は忘れてしまったんだよ、というような浅い感想を突き抜けて、宮沢賢治の世界の深さが深さとして感じられるようになってくるということです。

『ポラーノの広場』に、「いちょうの実」という短い作品が収録されています。冬間近、北風に連れられて、いちょうの実が、お母さんの木とも、もちろん、仲のよかった兄弟とも別れて、永遠

の別離の旅に出ようとしています。「僕はね、薄荷水を用意したよ。旅へ出て心持の悪いときは一寸飲むといいっておっかさんが云ったぜ。」「なぜおっかさんは僕へは呉れないんだろう。」「だから、僕あげるよ。おっかさんを悪く思っちゃすまないよ。」「…「あたしどんなめにあってもいいからおっかさんとここにいたいわ。」「…「そら、もう明るくなったぞ。僕はきっと金色のお星様になるんだよ。」「…「わたし困ってしまうわ、おっかさんに貰った新しい外套が見えないんですもの。」「わたしと二人で行きましょうよ。わたしのを時々貸してあげるわ。凍えたら一緒に死にましょよ。」「口々にこんな言葉を交わしながら、子供たちは北風に吹かれて、互いに別れていきます。「さようなら、おっかさん」という最後に聞こえた子供たちの叫び声に、宮沢賢治はこんな言葉をより添わせて作品を締めくくっています。「お日様は燃える宝石のように東の空にかかり、あらんかぎりのかがやきを悲しむ母親の木と旅に出た子供らとに投げておやりなさいました。」この作品が、生と死の、あるいは死と再生のつらいあわいに成立していることはすぐにわかるのですが、それにしてもこの明るさ、このやさしさはどこからくるのでしょうか。

文庫本は廉価であること(『ポラーノの広場』は560円です。高いかな)、手軽に持ち運べて、いつも、そして新鮮に、作品の中に埋められている疑問符に、直面させてくれるということです。そして、この疑問符に導かれて、作品世界の奥行きが感受されてきますが、それは作品がわかるということより、疑問の立て方によって、自分が徐々に、徐々に、ほんとうに徐々にですが、わかってくるということです。

文庫本のもう一つの利点は、すべてとはいませんが、作品につけられた解説に見事な考え方を見出すことがある、という点です。これは、疑問符をかかえる心には何よりの贈り物となります。『ポラーノの広場』には、文化人類学の中沢新一さんが解説を書いています。そうです、まさしくその贈り物について書くことで、中沢さんは見事な宮沢賢治論を展開しているのです(「贈与する人」)ちょっと、書き出しを読みましょう。

「魂は商品として、売り買いすることができません。情報として、蓄積したり、伝達したりすることもできません。魂は贈与されるものです。自然から人へ、人から人へ、魂は見返りを求めることなく、贈り与えられ、それを受け取った人は、自分が受け取ったものにまさるすばらしい贈り物を、他の人々に贈り与えようとするのです。人はいったい何の力にうながされて、このような贈与をおこなうのでしょうか。自分に親しい者たちだけが、幸福になったり、利益を得たりすることを望んでいるあいだは、人は贈与者になることはできません。そういう人は贈与ではなく、商売をするのです。商売は人と人との間に、距離をつくりだす力をもっています。人の所持品が、もはや魂にかかわる物ではなく、その人から切り離すこともできるようになったとき、はじめてその物は商品となることができます。おたがいに分離された人と人との間を、魂の問題などには無関心な商品と商品が、受渡されていきます。そこで働いているのは、人と物、人と人とを分離する「ロゴス」の力です。商品の売り買いによ

って、人と人とが結びつけられることは、ありません。

贈与は人々を結びつける力によって、働きをおこないます。つまり、それは「エロス」の力によって働くのです。何の見返りを求めることもなくおこなわれる贈与は、相手の気持ちにお返しをしなくては、という負担をつくりだすことはありません。贈り与えられるものは、魂と魂のあいだに、エロティックな一つの通路をつくりだします。そのとき、贈られる物といっしょになって、それを贈る人の魂が、贈られた人のなかに、侵入をはたすからです。」

中沢さんは、ふとわたしたちをとらえる人生の感動について、そのもっとも純粋な形において、語っているのだとおもいます。

こんな話をききました。私は看護婦さんとしてやっていけるのかと、たえず自分をつらく見つめて実習に参加した看護学生が、実習最後の日、自分の担当した若い母親から、あなたはいい看護婦さんになれますよ、わたしの赤ちゃんを最初に抱き上げた人として忘れません、とねぎらわれたとき、その学生の感動はいかばかりであったことでしょう。ここに、中沢さんの言う「贈与」がはたらいているのです。

わたしたちの近代社会は、契約と人権を二つの大きな柱にしています。たとえば、時給800円というのは契約を原理としていますし、セクシュアル・ハラスメントは人権を原理としています。契約と人権という概念自体は、17、18世紀ヨーロッパで、ホッブズ、ロック、ルソーなどが原理として打ち固め、19世紀に広く行き渡った考え方です。遅れてわが国にももたらされたものですが、その原理で社会が動いているにしても、それだけで生きる意味が満たされるわけではありません。たかだかヨーロッパでも200年、わが国でも100年しか歴史を持たない近代社会ですが、それ以前のはるかに長い時間、人間の関係が織り上げてきたものが、無意識の歴史の地下水流として、われわれの近代にも流れ込んでいます。だから、酷薄な19世紀のフランスの社会に『レ・ミゼラブル』のような作品が書かれ、大衆の心を動かすのです。宮沢賢治もその地下水流の一つから水を汲み上げ、乾いた現代を潤しつづけるのをやめないのです。

「贈与」という概念は、マルセル・モースの未開社会研究から生まれた概念で、レヴィ・ストロースなどに受け継がれてきました。もともとは、贈与の交換、互酬性、言い換えると、give and take を意味していたのですが、中沢さんはそれを、宮沢賢治の作品を読むこととおして、「魂の贈与」という美しい概念に磨いたのです。宮沢賢治と中沢新一、贈るものと贈られるもののあいだにはたらく、この世の深さ、この世の感動をめぐる無償の交換を、ここに見ることができます。

いいですよ、中沢さんの解説は、『ポラーノの広場』(新潮文庫)を手にとってごらん下さい。宮沢賢治と単なる解説を超える中沢さんの深い思想に、そして二つの魂の美しい交感に接することができるのですから。